

ル・フォール『コンソラータ』をめぐって

横塚祥隆

コンソラータ Consolata とはラテン語の *consolar* に由来し、慰安あるいは慰めることを意味する。十三世紀前半のイタリアの都市パドゥアを舞台にしたゲルトルート・フォン・ル・フォールの短篇小説『コンソラータ（慰める人）<sup>(1)</sup>』はこの語によって呼ばれる人々の活動を中心に据えて、その慰めの業の働きを暴力的独裁者アンセディオと教皇特使のフィリップ・フォンターナの対決において描き出そうとするものである。

教皇特使フィリップ・フォンターナ大司教は教皇軍によって攻略されたパドゥアに「和解と平和の使者」として到着する。市門を入ったフォンターナの目に写る荒廃した市街の有様は、同時に街と民衆の内面の荒廃を象徴している。神を失って残虐な独裁権力を振るった暴君の暴力に民衆と教皇党同盟軍の暴力が対置され、暴力は暴力によって打倒された<sup>(2)</sup>。その暴力を背景にしてフォンターナは町に恩赦を与え、町を聖務禁止<sup>(3)</sup>から解放する任務を帯びている。暴君と教皇特使とは暴力という行動規範を一にしている。しかし力は所詮それを用いる人間なくしては無に等しいことを作者は、フォンターナがやがて足を踏み入れる城砦の内部に放置された無数の武器によって暗示しているのだが、町に到着したばかりのフォンターナの胸中にはむしろその力による復讐、裁きへの思いが潜んでいる。

パドゥアはフォンターナの故郷であり、アンセディオの丘政下でかれの一族の多くのものが迫害され、殺された。パドゥア入城の際のかれの胸中には、永遠なる正義はどこへ行ってしまったのか、神はもはや存在しないのか、如何なる慰めも与えられることはないのかという抑え難い問いがあり、神の正義、審判に対する疑念が拭い難くある<sup>(4)</sup>。

その悪の力の現実を目にしてフォンターナは、かつて若い頃に取り組んだ悪の本質についての考察を思い

浮かべた。「悪はあらゆる存在者の源としての神からの完全な離反であり、結局は無―在 *Nicht- Sein* と同じである見せかけに過ぎない」。しかしかれの精神によれば非現実でしかない悪が「経験世界では途方もない力と現実性をもっている」という<sup>(5)</sup>当時かれが直面した問題は、今日にいたってもなお解決されていなかった。

そのフォンターナの耳に詩篇の歌が聞こえて来る。

主はすべての不正に苦しめられるもののために

正義と裁きをつくられる。(詩篇一〇三／六)

栄光がこの国にとどまり、

憐れみと誠実がであい

正義と平和とが口づけする (詩篇八五／一〇―一一)

地味な市民の身なりをして先端が三角形の帽子をかぶった数人の男たちが崩れ落ちた宮殿の瓦礫の上で歌っている。

しかしわたしは主の力の中を歩む

わたしはひたすら主の正義をほめたたえる (詩篇七一／一六)<sup>(6)</sup>

これがコンソラータ、すなわち「慰める人」とよばれるものたちであった。かれらが義務づけられている唯一の誓いは「慰めを必要とするものには、健やかであれ死に臨んであれ、その人を問わず、地位を問わず訪れること」とされている。<sup>(7)</sup>

フォンターナはこの声が自分に向けられ、自分を慰めてくれようとしていることを覚る。しかしそのかれが思う慰めは「主の正義」が力として現わされること、裁きが下されることにはかならない、かれの傍らには常に軍司令官が付き添っており、いつなりとその力を振るおうとしている。したがってフォンターナはこの詩篇の歌とそれを歌うものたちのことが気にかかりつつも、その歌の真の意味とそれがどのように慰めをもたらすのか想像することすらできないでいる。

「慰める人」はアンセディオの暴力が支配した慰めのない日々、その慰めのなさが具体的に現われるところには必ず訪れ、どこでも誰にも拒まれることがなかった。そのことを宿舎とした家の女主人から聞かされたフォンターナはかれらの行為はアンセディオにも当てはまるのかを問い返さざるを得なかった。もちろん「慰める人」の声は暴君アンセディオによって虐げられたものだけに向けられているのではない。かれらはアッシージの貧者のようにすべてのものを「兄弟」と見なしており、アンセディオをさえ「兄弟」として

いる。  
アンセディオはパドゥアの町に君臨し、暴威を振るった時にも「慰める人」をなぜかわからぬが追放する

ことをしなかった。あるとき彼について「残酷な彼がもう一度慈悲の心に打たれて砕けることがあるだろう<sup>(8)</sup>」と予言されたことがあった。この言葉を思い出させられるのを恐れているのか、今はまた武装した市民に包囲された城砦の奥に閉じ籠もったまま「慰める人」を寄せつけようとしなかった。その暴君がつかれらる呼び寄せたのか、フォンターナ到着後のある夜一人の修道士がフォンターナをアンセディオのところ  
に案内する。

フォンターナが暗い広間にただ一人残されたアンセディオの姿に見たのは、「何か遠いもの、この世ならざるもの、幽鬼とも言えるようなもの」であって、かれは「完全な空」<sup>(9)</sup>の中で、もはや存在しないことと Schon-nicht-mehr-vorhanden の中で揺らめいていた。そのアンセディオの姿の内に恐ろしい真理が近づいて来るのを感じ、奈落の底へと引き込まれるかのように、それどころか無限の夜を通り、最後の審判の日までその裁きの道を歩き続けなければならないかのようにフォンターナは感じる。だがその裁きはフォンターナの掌中ではなく、永遠の審判者の手の中にあり、フォンターナ自身がアンセディオとともに被告の座につかされているかのように感じる。

「慰める人」は確かにアンセディオに向かって語り掛ける。その言葉は慰めであり同時に、アンセディオにその罪を悟らせ、悔い改めを勧めるものだった。「慰める人」の内の一人が語り掛ける。

「わたしたちはあなたの死の手の犠牲になったものたちを慰めてきたもの、死に臨んだあなたを慰めてきたもの（略）あなたほど哀れな人間はいまだかつて存在したことはなかった、あなたほど罪を負ったものはいなかった（略）神はあなたの罪業の多くを祝福に変えた（略）あなたのせいで完成されたも

のがいた、死に臨んであなたを赦したものがいた（略）あなたはそれと望むことなくして多くの魂を浄めた。数え切れないほど多くのものがあなたの悪行によって初めて正義を愛することを学んだ（略）あなたには力ある懺悔説教者だった<sup>(10)</sup>」

悪が望まずして善を行うというのは、何もメフィストフェレスを引き合いに出すまでもなく、もしかしたらありふれた考えであるかもしれない。だがとにかく「罪の時は救いの時」であり、罪と救いは紙一重、とは簡単に言えないが、なぜならその間には「慰める人」がアンセデオに勧める「あなたが知らずに教えたことにいまや自分で耳を傾け、途方もない罪から離れ<sup>(11)</sup>」ること、すなわち悔い改めが必要だからだが、キリスト教文学においては『哀れなハインリヒ』の昔からこうした型が見られる。ハインリヒのそばには貧しい農家の娘が付き添っており、その娘の犠牲的行為がハインリヒを悔い改めへと誘う。その悔い改めを勧めることがここではほかならぬ「慰める人」の「慰め」であり、かれらはそのようにしてアンセデオに同伴する。

「慰める人」をそうした同伴者とすることができるならば、パーオラのフランチェスコも権力者の臨終の床に付き添い、罪の認識と悔い改めを勧める同伴者、慰める人に数えられるに違いない。

フランチェスコはフランス王ルイ十一世<sup>(12)</sup>によってイタリア南部からはるばるトゥールまで呼び寄せられる。ルイもアンセデオと同じく恐怖によって支配し、同じく自らの命の終焉の近いのを感じながら孤独の内に沈んでいる。「いまのわたしにわかっていないことが、いかに恐ろしいことになることか<sup>(14)</sup>」とロザリオをま

さぐり、祈り始めるルイが恐れているのは死者たちであり、死者たちの国であり、それと意識されてはいないものの最後の審判である。

その王の求めに応じて、教皇の命に従って王の下にフランチェスコが留まるのは「王の魂のためであり、王の魂への憐れみによって」<sup>(15)</sup>である。それ故フランチェスコがルイに向かって説くのは、これまでの王としての行動の中で虐待してきた「自分の魂を憐れみなさい」<sup>(16)</sup>ということである。なぜなら王は「これまでに行ってきたことすべてによって自分の魂を損なって来た」からである。しかし自分の行ってきたこと、諸侯を打倒し、かれらが奪おうとしたものを奪ったのはすべてフランス王としての聖なる務めであり、「なさねばならなかったこと」<sup>(17)</sup>と言う王にはまだ自らの内面を覗き見ることはできない。

しかしそのルイの姿はアンセディオに重ならないか。すべての力を剥奪され、そのことによって「真の力を獲得し、何者にも克服されること」<sup>(18)</sup>がなくなったと豪語するアンセディオが、自らの行って来たことの真の意味に気付かなかったように、ルイもそれまでの自分の行為が自己と他者とに何をもちたらし、何を意味しているのかをいまだ覚ってはいない。アンセディオの場合は悪罪が他者を救いへと導いたこと、ルイの場合はかれの正当かつ聖なるものと思いきんで来た行為が他者を苦しめ、自らの魂を損い、「内なる神を損なった」<sup>(19)</sup>こと。

ルイの行為の真の意味を象徴しているのが、かつてルイを玉座から追い落とそうとした科で王宮の地下に幽閉されている捕囚である。フランチェスコの嘆願にもかかわらず囚人を解放しようとするルイの心を支配しているのは憎しみ。それこそがルイの魂を損なっている。同時に王の憎しみは国民の中に食い込み、王

によって虐げられたものたちの呪いと亡霊は王を不安に陥れる。ここにおいて王はかつてわからないままに恐れれたものが何であるかを覚る、「わたしは亡霊たちより主を恐れる。どこへ逃れたらいいのか。亡霊たちはわたしを主へと追い立てる、だが私は主の前で後込みする」<sup>(20)</sup>。

そのルイ王に向かって語るフランチェスコの「主に向き合わなければなりません……審判者はあなたに平安をもたらすでしょう」<sup>(21)</sup>との論しを受けて、王はかつて「なさねばならぬこと」として自らに容赦していたことこそ「恐ろしいことであり、それ以上に恐ろしいことを望みまた考えていた」<sup>(22)</sup>ことを告白する。

ルイはフランチェスコが自分を離れず、その祈りが自分に付き添い、死後にも祈りをつづけることを求めて、安らかに最期を迎える。ここにおいて同伴者、慰める人としてのフランチェスコの任務は終わる。

だが変わったのは王のみではなかった。王に付き添い、王にその罪を見つめることを説いたフランチェスコ自身も変化を被る。なぜならかれは王の傍らを離れず、王のために祈ることを約したからである。その約束によってかれは王の苦しみと罪とをその身に引き受けたからである。「この世の罪のすべてを、悪の力を身をもって知り、その苦しみと罪の中で耐えなければならぬものたちが存在する。そのものたちもすべてもののに代わって苦しみ、そしてわたしたちがみなそのものたちの罪の贖いをしなければならぬ」<sup>(23)</sup>。つまり苦しみと罪の中で耐えなければならぬ王の重荷をフランチェスコが担うことになったのであり、これまでとは逆に王がフランチェスコの同伴者となり、フランチェスコに「兄弟たちの過誤を自らの苦しみと待望によって贖ってきた聖人・聖女たち」<sup>(24)</sup>への道を歩ませるのである。



魔女裁判が猛威を振るつた時代に、刑場に引かれる「魔女」たちの聴罪司祭を務めたフリードリヒ・シュペーの場合はどうだったろうか。<sup>(26)</sup>

シュペーの場合はむしろかつて魔女として処刑された女性マクダレーナが初めからかれの同伴者であるかのようである。「拷問を逃れるために罪科を認めたら、それは罪でしょうか」<sup>(26)</sup>とその女に問われて、シュペーは「罪である」としか答えられなかった、なぜなら有罪を認めることによって人間の手にではなく、神の手にある「死」を自らに与えることになるからであり、虚偽の告白をすることで罪を負って主の前に立つことになるから。<sup>(27)</sup> そのマクダレーナの姿と問いとがシュペーから離れない。そしていま再びかれの胸の内での問いを繰り返す声に対してシュペーはかつてとは反対の答えをすることになる、「断罪されることはない、安心して主への道を進みなさい、あなたをその道に追いやったのは人間の愚かさで卑劣さなのだから、主はあなたを憐れんでくださるでしょう」。<sup>(28)</sup> この両度の問いの間に現実にとどのくらい歳の月が過ぎたのか明確ではないが、その間あの問いはシュペーに付き添い、かれの内に変化を生み出していた。しかし変化はそれだけに留まるものではなかった。ルイ王との約束がフランチェスコに付き添い、フランチェスコにルイの罪科を、苦しみをその身に引き受けて、贖罪の道を歩ませるようになったのと同じく、マクダレーナとその問いはシュペーを彼女の罪を、あるいは彼女を裁いたものたちの愚かさや卑劣さの罪を負う道へと導いたのである。「罪科が負われなければならないものなら、わたしに科せられるがいい、わたしがあなたから受け取るう」。<sup>(29)</sup>

「慰める人」が歌った「憐れみと誠実」、「主の正義」とはおそらくそのようなものであっただろう。フラ

ンチエスコはルイ王に平安をもたらず正義の審判者と向き合うことを説き、シュペーはかつて投げかけられた問いに対して誠実であることによって主の正義とは憐れみであることを教えられた。「慰める人」は憐れみの心をもって、その務めに誠実に、アンセディオに対して悔い改めて主の正義に向き合うことを勧めた。

「慰める人」のあの言葉はたしかにアンセディオに向けられたものであり、フォンターナに向けられたものではなかった。むしろあの言葉はフォンターナがアンセディオに向かって語り掛けるべきものだったことをフォンターナはようやくくして気付く<sup>(30)</sup>。詩篇に歌われた正義と裁きとはかれが求めたような力に対する力によるものではなく、憐れみの実践であることをかれに論じた。フランチエスコがルイ王に語ったように「審判者は平安をもたらし、完全な平安は真理の内にある」ものであって、幽鬼ともいえるようなアンセディオの姿の内にフォンターナが「恐ろしい真理」を感じたのは、その真理がフォンターナの内の正義を實現すべき力への信奉を根底から打ち崩すものだったからである。

「慰める人」が付き添ったのはアンセディオばかりではなく、かれと共に裁きへの道にあるを覚えさせられたほかならぬフォンターナもかれらによって慰めを与えられた。若い日の悪についての考察で未解決のままに残さざるを得なかったあの問いに対する答えが与えられたからである。アンセディオに具現されていた悪は、見せかけに過ぎず、善の欠如、善の無力以外の力を持っていなかった、城砦の内部に残された無用の長物に墮した無数の武器がそれを使う人間を失って無力化したように、悪はそれ自身では如何なる力も持っていないことを悟らされたからである。そしてそのフォンターナに向かって「慰める人」は語り掛ける、  
 「永遠の審判者がやがてわたしたちを裁くようにこのものを裁きなさい。厳正に、憐れみの心を持って」<sup>(31)</sup>。

フォンターナはなおも力の行使に執着する司令官に対して誰も殺してはならないことを命じ、罪科あるものは正当な裁判にかけるようにと判事たちを任命し、町の聖務禁止を解き、アッシージへと隠遁した。アンセディオに対してもなされたあの予言はフォンターナにおいても実現された。かれこそ「憐れみの心に打たれた」ではなかったか。フォンターナにもフランチェスコやシュペーに見られたような変化が起きていたのであり、アッシージで過ごすかれには「慰める人」の姿とその言葉が付き添っていたのではないだろうか。

罪あるものに付き添い、その罪を自らに引き受ける同伴者としてのキリストあるいはキリスト者、すなわち慰める人の形象はわが国の文学作品にも見られるところだが、<sup>(32)</sup>そのような同伴者の姿にはキリスト教文学そのものが重なりあっている。「キリスト教が世に行うのは、罪ある人間に対する心からの愛」であり、文学においてはそのキリスト教に見られるように「普通世俗に支配している価値判断と法則との転換が行われる」からである。追放されたもの、処罰されたものの「乱れた道を深淵まで付き添い、没落し、滅び行くものを胸に抱き寄せる」<sup>(33)</sup>のが文学であり、ことにキリスト教文学の本質であるとすれば、『コンソラータ』はまさにその一つの典型であると言えよう。

〔注〕

- (1) Gertrud von le Fort, *Die Consolata*. Insel-Verlag Wiesbaden. 1955. 以下本書からの引用は C-10. のように記す。

この作品の中では慰めを与える人々の集団がコンソラータと呼ばれ、ドイツ語での言い換えは Bruderschaft (信心会) とされているので、敢えて「慰める人」を題名に加えた。以下においては混同を避けるためにその人を指す場合には「慰める人」とし、作品を言う際は『コンソラータ』とする。

この集団に属しているのは、厳密には司祭叙階を受けた司祭など誓願を立てた聖職者である修道士 Klerikerbrüder と区別され、主として修道院等の雑務に従事する助修士、労務修士、平修士などと呼ばれる Laienbrüder の集団である。こうした人々の活動についてのまとまった文献は参考文献の (4) に挙げたものがほとんど唯一と言えるようである。しかしこれもドイツ各都市における事情を個々に調査報告しているものであり、そこから共通事項が推論されている。以下は文献 (1)―(5) などによるものである。

作品の時代背景は十三世紀前半のイタリアであるが、この時代にあるいはそれ以前のイタリアに「慰める人」に類した集団や人々の活動が存在したかどうかについては筆者には詳らかにし得ない。おそらく十字軍時代に生まれた宗教騎士団、特に聖ヨハネ騎士団の活動と無縁ではないだろうと想像するのみである。聖ヨハネ騎士団はもう一つの騎士団、聖堂 (テンペル) 騎士団とは違って、その出発においては戦闘よりは病人や窮乏者の世話を専らにしたからである (文献 5 による)。

多くの巡礼者が押し寄せた十一世紀末のイェルサレムにはすでに救貧院があり、聖ヨハネ騎士団のような宗教騎士団や他の信心会によって運営されていた。そこの様々な仕事は聖職者、平信徒、労務修士によって分担され、病人は医師の世話を受け、十分な食事が与えられた。もちろんそうしたいわば肉体の治癒ばかりではなく、魂の救いも重視された。死亡した巡礼者は死亡した修道士と同じよ

うに扱われ、「白い十字架のついた赤い布」でその棺は覆われた(文献5)。「コンソラータ」に描かれた「慰める人」はこのような任務を受け継いだものと見なしよう。『コンソラータ』に描かれた「慰める人」の性格と活動をさらに理解するためには、時代は少し下がりまたドイツでのことであるが、いわゆる「救貧信心会」Die Elendenbrüderschaftがより参考になると思われる(文献4)。

「救貧信心会」は、その発生時においては必ずしも教会や聖職者と強く結びついていたわけではなかったようであり、むしろ都市在住の手工業に従事する職人やその妻、また徒弟などによって、親方の同業組合から独立して作られていた。かれらは少なくともその労働の報酬によって生計を立てることができたが、手に職もなく農村部から都市部へ流入してきたものたち、病人、身体障害者、ハンセン病患者、盲人たちは援助や喜捨に頼らざるをえなかった。そうしたものへの援助とさらにはそうしたものが死亡した場合、ことに死者に近親者がいない場合の埋葬の世話をすることがこの信心会の主要な任務であった。殊に十四世紀に入って以降の度重なるペストによる死者の著しい増加が信心会の存在に重要度を加えた。そのかれらの活動の動機となり、活動を促したのが、窮乏者に対する慈悲的活動は、それをなすものの魂の永遠の救済の前提であり、持てるもの、富めるもの、神によしとされる使命であると説く教会の教えであった(文献2)。なかでも死者を葬ること、特に死亡した巡礼者や外来者を葬ることは旧約時代からの宗教的義務と見なされており(文献4、エゼキエル三九章一四節以後)中世に至っては死者の埋葬は、マタイ伝二五章のイエスの例え話に見られる渴いたものに飲ませ、旅人に宿を貸し、裸のものに着せ、病人を見舞い、捕らえられたものを牢に訪ねるという行為に等しいものと考えられるようになったとされる(文献4)。ただし聖職者ではない信心会の平信徒が『コンソラータ』に描かれたような死に臨んでの「悔い改め」を勧めるというようなことまでその任務としたかどうかは明確ではない。

(2)

この作品は第二次大戦中に執筆され、一九四七年に出版された。そうした事情もあって、この作品は

後に言及するシュナイダーの「権力者の死」(執筆は四二年。四六年発表)や「慰める人」(三年執筆、三七年発表)などと同じように、しばしばナチ時代の暴力に対置されるものとして考えられている。しかし小論では特にそのことには触れない。

- (3) 犯罪を犯した聖職者や信徒またある地域に対する懲罰、ミサ等の聖務執行や秘蹟の授受の禁止をいう。教会法典一三三二—一三三三。

(4) C-10.

(5) C-23.

- (6) ここに引用したものの以外にも数カ所の詩篇からの引用があるが、その引用に際してル・フォールは、当然のことであるが、ルター訳聖書を使っているようであり、当該の詩句の文言は現行の共同訳 Einheitsübersetzung (Katholische Bibelanstalt Stuttgart 1984) とはかなり違っている。それは日本語訳の場合にも同じ事情にある。ここでは作品中に引用されているものを筆者が訳した。なお参考のために、ルター訳(L)と共同訳(B)、それに日本語新共同訳(共同訳聖書実行委員会訳 一九八七)を掲げておく。

詩篇 一〇三\六：(L) Der Herr schafft Gerechtigkeit und Gericht allen, die Unrecht leiden.

(E) Der Herr vollbringt Taten des Heiles, / Recht verschafft er allen Bedrängten. 主はすべての患げられている人のために／恵みの御業と裁きを行われる。

詩篇 八五\一〇\一一：(L) Daß in unserem Lande Ehre wohne, / daß Güte und Treue einander begegnen, / Gerechtigkeit und Friede sich küssen. (E) Seine Herrlichkeit wohne in unserm Land, / Es begegnen einander Huld und Treue, / Gerechtigkeit und Friede küssen sich. 栄光はわたしたちの地にとどまらばじょう。／悲しみと喜びとは出会い／正義と平和は口づけ

詩篇 七一\二六：(L) Ich aber gehe einher in der Kraft des Herrn, / Ich preise Seine Gerechtigkeit alleine. (E) Ich will kommen in den Tempel Gottes, des Herrn, / deine großen und

gerechten Taten allein will ich rühmen. わたしは力を奮い起こして進みいで／ひたすら恵みの御業を唱えまじやう。

- (7) C-14.
- (8) C-16.
- (9) C-30.
- (10) C-34ff.
- (11) C-35.
- (12) Reinhold Schneider *Der Tod des Mächtigen*. in: *Gesammelte Werke* Bd. 3. Insel Verlag 1978 S. 23-75. 以下本書からの引用はT-23のよりに記す。
- Francesco von Paola 1436-1507. 少年時フランシスコ会で生活。のち故郷のバーオラの近くの海を望む洞窟で隠修士の生活をはじめ、次第にその周囲に修道者が集まり、「いと小さき兄弟修道士会」(Minimen od. Paulaner)を創設(1474)、厳格な禁欲で知られる。フランスのルイ十一世は一四八二年に臨終の床にあつてかれを援助者(Beistand)として呼び寄せた。王の懇願によって王太子(後のシャルル八世)の教育にも当たり、晩年はトゥールに修道院を建てそこで死去。
- (13) Ludwig (Louis) XI 1423-83.
- (14) T-58.
- (15) T-60.
- (16) T-61.
- (17) T-62.
- (18) C-28.
- (19) T-63.
- (20) (21) (22) T-70.

- (23) (24) T-72f.
- (25) Reinhold Schneider, *Der Tröster*. Präsenz-Verlag Gnadenthal 1992. 以下本書からの引用は TR-10 のように記す。
- Friedrich Spee von Langenfeld 1591-1635. イエズス会士、詩人、説教者。對抗宗教改革において指導的役割を果たし、プロテスタントと対立。魔女裁判を批判する著作を発表した。また宗教詩人として *Trutz-Nachtigal* (1649) などを発表した。
- (26) TR-27.
- (27) TR-29.
- (28) (29) TR-31.
- (30) C-35.
- (31) C-37.
- (32) 『沈黙』を初めとする遠藤周作の諸作品には、同伴者キリストという遠藤の基本的見解が見られるだろう。
- (33) Gertrud von le Fort, *Vom Wesen christlicher Dichtung*. in: *Aufzeichnungen und Erinnerungen*. Benziger-Verlag Köln 1956. S. 45-48. 日本語訳は、船山幸哉／他訳『手記と回想』ヴェリタス書院 一九五九年 五三―五七頁。このような考え方は、無前提に結び付けるのは危険だろうが、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の教育州の章にも見られる。そこにはこうある、「低劣と貧困、嘲笑と軽蔑、汚辱と悲惨、苦惱と死を神的なものと認め、そればかりか罪惡自体や犯罪をも、聖なるものの妨げではなく、それを推進するものとして敬い愛するようになるには、どれほどの道程が必要だったことでしょうか」(登張正實訳、潮出版社 一九八一年 一三四頁)。



〔参考文献〕

- (1) Norbert Ohler, *Pilgerleben im Mittelalter*. Zwischen Andacht und Abendener. Verlag Herder Freiburg 1994
- (2) Evmamaria Engel, *Die deutsche Stadt des Mittelalters*. Verlag C. H. Beck München 1993
- (3) Dieter Zimmerling, *Der Deutsche Ritterorden*. ECON Verlag Düsseldorf 1988
- (4) Ernst v. Moeller, *Die Elendenbruderschaften*. Ein Beitrag zur Geschichte der Fremdenfürsorge im Mittelalter. Unveränderter fotomechanischer Nachdruck der Originalausgabe 1906 nach dem Exemplar der Universitätsbibliothek Leipzig. Zentralantiquariat der Deutschen Demokratischen Republik Leipzig 1972
- (5) S. Fischer-Fabian, *Der Jüngste Tag*. Die Deutschen im Späten Mittelalter. Droemer-Knaur 1985
- (6) Alfred Focke, *Gertrud von le Fort*. Gesamtschau und Grundlagen ihrer Dichtung. Verlag Styria Graz 1960.
- (7) *Spee-Jahrbuch* 1. Jahrgang 1994, Hrsg. v. der Arbeitsgemeinschaft der Friedrich-Spee-Gesellschaften Düsseldorf und Trier. Spee-Buchverlag Trier.